

住民の認識・利用管理を考慮した屋敷林の分類及びその特性に関する研究

～岩手県胆沢町の屋敷林を事例として～

A Study on Understandings and Management of Homestead-woodland by Residents in
Isawa-cho, Iwate Prefecture

太田未来 小林久

Miki OTA Hisashi KOBAYASHI

1. 背景・目的

人為の働きかけがあることで成立する二次的自然の保全をより実効性のあるものとするためには、当事者（利用者、管理者）の対象（自然）に対する認識や関わり方への配慮が不可欠であると考えられる。本研究では、生活に関わりのある屋敷林を対象に、形態、住民認識、利用管理などを総合的に分析し、住民の認識、利用管理を考慮した屋敷林の分類を試み、屋敷林保全において管理当事者である住民への配慮の重要性を考察する。

2. 研究方法及び結果

美しい屋敷林を有する散居集落で全国的に有名な岩手県南内陸部、胆沢扇状地上に位置する胆沢町を対象に、既存文献、航空写真等から対象地の地理的条件、水利開発史、屋敷林形態を把握し、特徴の異なる代表的な3集落（新里、大谷地、中沢：Fig. 1）を選定した。選定した3集落から平均的な屋敷林面積の家と例外的な面積の家を抽出し、住民の認識、利用管理を訪問、面談によりヒアリング調査した。ヒアリング結果について数量化し、類による分析を行い、屋敷林を分類し、分類ごとに住民の関わり方、認識の特性を整理した。さらに3集落の全戸（新里50戸、大谷地63戸、中沢49戸）を対象にアンケート調査を行い、分類の特性を検証し、これらの結果から屋敷林保全に対する住民認識の重要性を考察した。

（1）対象集落概要

新里は水沢段丘（低位段丘）に位置し、水利開発が最も早く行われた集落である。屋敷林の面積は400～600 m²以下が多い。大谷地は堀切断面（中位段丘中位面）に位置し新里に続いて開発された集落である。屋敷林面積は1000～2000 m²の割合が大きい。他と比較してバラツキが大きいことを特徴とする。中沢は上野原段丘（中位段丘上位面）に位置し、戦後になってから開発された集落で、屋敷林面積は1000～2000 m²が多い。

（2）ヒアリング調査

調査は、2002年8月21日から9月1日に新里15人、大谷地10人、中沢16人（計41人）を対象に実施した。ヒアリング項目および、屋敷林の形態に関してそれぞれの相互関係を整理し、主に住民の

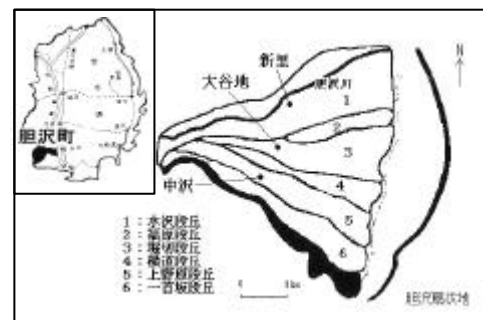


Fig. 1 対象集落
Study Area

Table 1 地理的条件と水利開発史
Characteristic of Topography and Irrigation
Development of Each Settlement

集落	段丘	標高	土壌	生産性	排水	水利開発
新里	水沢 段丘	180 ～50	黒泥～ 灰色低 m 地土	高	不良	1570～72年に 茂井羅堰が開堰。
大谷地	堀切 段丘	190 ～70	黒ボク土 ～70（台地の m 土壌）	低	良	寿安堰が1618年 に開削 1631年 に完成。
中沢	上野 原段 丘	220 ～80	黒ボク土 と褐色森 m 林土	低	良	1951年から開削 1963年に開削 線用水路が完成。

茨城大学大学院農学研究科

Graduate School of Agriculture, IBARAKI Univ.

茨城大学農学部

School of Agriculture, IBARAKI Univ.

屋敷林、住民認識、環境管理、農村景観、散居集落

認識・利用管理に関する 25 項目について分析（数量化 類）を行い、その結果に認識の程度（ヒアリング結果）なども加味して、屋敷林を 7 グループに分類した。

分類結果を集落別に整理すると、Fig. 2 のようになり、各集落に複数のグループが混在していることが分かる。屋敷林に対する住民の関わり方から、新里で見られる A,B グループは景観機能を、大谷地、中沢で見られる D,E,F グループは利活用を、中沢で見られる G グループは特に防風機能を重視しているグループであると考えられた。これは屋敷林の機能に対する認識に、地域性がみられること、みられないことをうかがわせた。また、今回の分析では屋敷林の機能に対して十分な認識を持たないグループの存在も明らかとなった（C グループ）。

（ 3 ） アンケート調査

一戸につき 5 枚の回答用紙を同封したアンケートを郵送により配布し、郵送により回収する方法で、2002 年 11 月～12 月に実施した。回収率は 46%、（新里 66 人、大谷地 82 人、中沢 71 人、計 219 人）であった。

屋敷林を「あっても無くてもよい、いらない」とする割合は、新里 24%、大谷地 12%、中沢 6% となり、ヒアリングで分類された屋敷林の機能に対して認識の薄い C グループが、新里、大谷地に多いことが確認された（Fig. 3）。屋敷林に自然を感じるかについては、「とても感じる」割合が新里 23%、大谷地 38%、中沢 39% から、新里で低いという地域性が読み取れた（Fig. 4）。一方で、美観を「気にする」割合は、新里 70%、大谷地 65%、中沢 62% で、新里で若干高い傾向を示しているが、ヒアリング結果とは異なり地域性は判然としなかった。（Fig. 5）

3 . 考察

屋敷林の類型化、アンケート結果から、屋敷林に対する認識に地域性がみられること、みられないことを示した。また、屋敷林の重要性を強く意識している住民にも、重視する機能に違いがあること、一方で屋敷林の重要性を認識していない住民がいることなど、住民の考え方には異質で、対立するものが混在していることを明らかにした。これらの結果は、屋敷林の保全において、屋敷林と住民との関わり方を考慮した注意深い方策の検討が必要であることを示唆している。屋敷林保全を実効性のあるものとするためには、管理者である住民それぞれの認識の違いを踏まえた各階層（グループ）間の相互理解による異なる考え方の認知、問題意識の共有が求められるものと考えられる。

< 参考文献 >

- ・ 斉藤享治（1978）岩手県胆沢川流域における段丘形成 地理学評論 51-12. 853-863
- ・ 池田雅美（1966）胆沢扇状地における開発過程の歴史地理的研究 人文地理 18 1-19

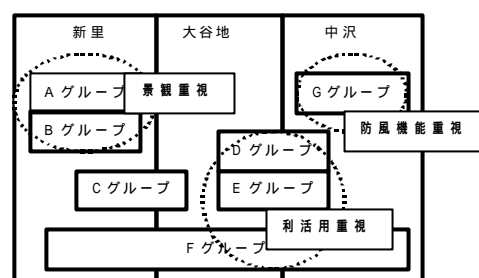


Fig. 2 集落別のグループ分布と重視する機能
Relation between Classified Groups and Settlement

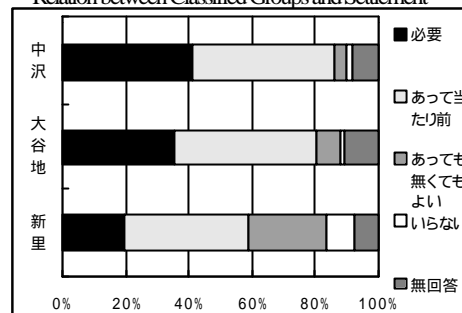


Fig. 3 屋敷林に対する認識
Necessity of Homestead-Woodland

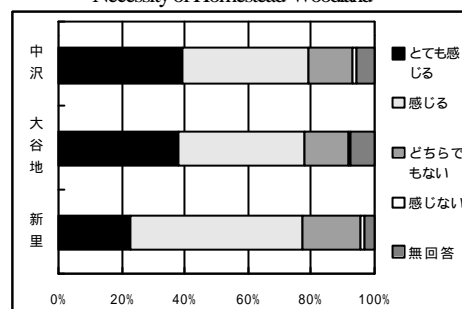


Fig. 4 屋敷林に対する自然認識
Naturalness of Homestead-Woodland

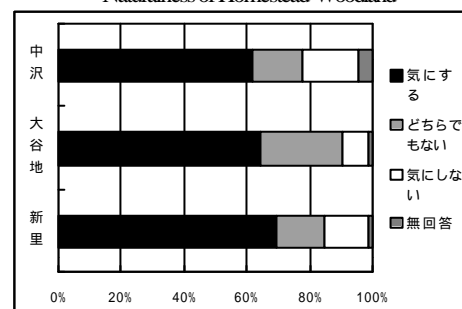


Fig. 5 美観への配慮
Understanding on Importance of Landscape